

一人一人が未来の創り手となる豊かな学びの創造

— 小学校体育科における学びがつながることを目指した問いの工夫と振り返りの工夫を通して —

指導主事 塩村 勝正

研究協力員 山鹿市立鹿北小学校 教諭 浅野 順二

1 研究の視点について

(1) 視点1『見方・考え方』に着目した問いの工夫について

体育科固有の「見方・考え方」は、新学習指導要領解説体育科編では、生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現する観点を踏まえ、「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割から捉え、自己の適正などに応じた『する・みる・支える・知る』の多様なかわり方と関連付けること」と示されている。これまでの体育学習において、運動量の確保が重視され、「する」行為による体力の向上を求める考えがあった。しかし、運動を「する」価値だけでなく、運動を「みる・支える・知る」観点から価値を認め、体育学習等の教育活動で、生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育むことが強調されていると考える。

運動を「『する・みる・支える・知る』の多様なかわり方」を通して、運動の楽しみや喜びを感じながら、体力の向上を図るためには、児童が運動に主体的に取り組めるような「問い」が必要であると考える。「どうしたらできるのか」「なぜできるのか」等、児童が運動とかかわり、自己や他者とかかわりながら、取り組む運動の解決を図る「問い」が有効ではないかと考えた。また、一単位時間及び単元全体の構成を工夫することで、「問い」を解決するために、試行錯誤したり、多様な他者と協働したりする学習活動の充実が図られると考えた。

(2) 視点2「学びを実感する振り返りの工夫」について

学習活動を通して、児童たちが自身の成長を実感し、新たな活動につなげることができるようにすることを目指し、「学びを実感する振り返りの工夫」を設定した。学習内容の深まりや広がり、他者との協働による解決場面等の学習方法のよさを児童たち自身が認識できるようにすることが、学びを実感するために重要であると考えた。

そこで、授業を行う教師が児童をしっかりと見取り、

児童の発する言葉に敏感になりながら、適切な場面で学びのよさを価値付けることとした。

また、児童たち自身が自分の動きの変容に気付けるように教具の工夫や協働的な学習場面を適宜設定し、学びの価値（意味）に気付かせるようにした。

自己評価でも「分かったと思うことがあったか」「深く心に残ることがあったか」など、振り返りの視点を明確に示すこととした。

2 研究の実際

検証 小学校第5学年

単元名 「体操教室の先生になろう」

(B 器械運動 ア マット運動)

(1) 本単元の授業設計

① 実態から

めあてに向かって、一生懸命取り組む児童が多い。これまで自分の動きをよくするために、お互いの動きを見たり、教え合ったりする学習経験を重ね、積極的に学び合う姿も増えてきている。しかし、苦手な運動やできない技があると学習に消極的になる児童がいる。また、よりよい動きのこつを探る学習では、課題に対する考えをもつことができるが、自分の言葉で表現できる児童は少ない。

② 単元観

本単元は、マットを使っているいろいろな方向へ回ったり、転がったり、手で体を支えたり、バランスをとったりするなど、日常の動きと異なったいろいろな動きを体験できる運動である。また、運動体験をする中で「腕支持感覚」「バランス感覚」など様々な運動感覚を養うことができる運動である。

しかし、児童が身に付けている様々な感覚や動きには個人差があり、「できる」「できない」ことが明確であるため、学習意欲が低下しやすい運動である。動きのこつを知り、そのこつと自分の動きを比較しながら課題をとらえ、仲間との協働的に学ぶ学習を仕組むことが大切である。

本単元において、課題をつかみ、その解決に向け

た学習を経験させることは、未来の創り手となる「豊かな学び」の創造につながるものであると捉える。

③ 指導観及び研究の視点

ア 指導観

- 「体操教室の先生になろう」というテーマを設定し、学習したことを活用しながら、下学年に技を披露したり、教えたりできるようにする。
- 単元全体を通して、本運動に必要な基礎感覚・基礎技能の習熟を図る「スキルタイム」を設定する。
- 単元前半を「やってみる」(回転技や倒立技にチャレンジしよう)とし、基本的な技の習得を図るようにする。児童のつまずきを中心課題とし、仲間と協力しながら、自己の課題の解決を図らせる。
- 単元後半を「ひろげる・ふかめる」(体操教室を楽しもう)とし、連続技を構成し、技を美しく、スムーズにできるように仲間と協力しながら技の習熟を図り、運動の楽しさを味わえるようにする。

イ 研究の視点

(ア) 研究の視点 1

- ①「体操教室の先生になろう」という単元を貫くテーマを設定する。この設定は、児童が4年生に「自分のマット運動での学びを教えたい」といった意欲を掻き立てるばかりではなく、積極的に技能のこつを仲間と協働的に学びながら習得していくための、切実性のある「問い」を生み出すことにつながる。
- ②腰を高く、膝を伸ばした安定した技の習熟を目指すために、児童のつまずきや気付きをもとに学習課題の提示を行い、動きのこつを共有化させていく。「技の入り(着手など)」「回転動作」「着地」の3つの場面から課題場面を焦点化し、動画等で視覚的に捉えさせていく。

(イ) 研究の視点 2

- ③仲間とのかかわりやタブレット等を活用し、モデルの動きと自分の動きを比較させ、技の出来栄を振り返らせるようにする。また、児童同士のかかわりの中で、教師が児童の言葉を受け止め、その言葉を広げるなど、児童同士をつなぐ役割をしながら、主体的な学習展開が図れるようにする。
- ④技カルテカードや技ボードを活用し、自分の動きの課題を捉えたり技の習熟度を振り返ったりすることができるようにする。

④ 単元の目標及び評価規準

単元の目標	①基本的な回転技や倒立技を安定してできるようにするとともに、その発展技をできる。また、それらの技を繰り返したり、組み合わせたりすることができる。(技能) ②運動に進んで取り組み、約束を守り助け合っ
-------	---

	運動をしたり、場や器械・器具の安全に気を配ったりすることができる。(態度) ③自己の能力に適した課題を知り、課題に応じた練習の場や段階を選ぶことができる。(思考)
度心運動への関心・意欲・態度	①進んで運動に取り組もうとしている。 ②約束を守り、友だちと助け合って運動しようとしている。 ③安全に気を付け、マットや補助具の準備や片付けをしようとしている。
の運動についての思考・判断	①自分の動きとモデルの動きを比較したり、友達のアドバイスを聞いたりして、自分の課題を設定している。 ②自分が取り組む技のこつを知り、技をできるようにするための運動の行い方を工夫している。
運動の技能	①安定した開脚前転や開脚後転ができる。 ②安定した側方倒立回転ができる。 ③自分の力に合った技を繰り返したり、組み合わせたりすることができる。

⑤ 単元計画

単元を貫く問い：「体操教室の先生になろう」

次	時	学習活動	評価及び研究の視点
一	1	1 オリエンテーション (1) めあてと学習の流れを知る。 (2) 基礎感覚・基礎技能づくりのポイントを知る。 (3) 様々な場で前転や後転をやってみる。	【関心・意欲・態度】 ①③観察 【研究の視点1】 ①マットで様々な回りを体験させ、マット運動の楽しさを感じさせる。
二	2	2 やってみる 「できる技を安定させたり、出来そうな技に挑戦したりしよう」 (1) モデル動画と自分の動きを比較し、課題をつかむ。 (2) よりよい動きのこつを考える。	【思考・判断】 ①ワークシート 【研究の視点1】 ②児童のつまずきや、気付きをもとに学習課題の提示を行い、動きのこつを共有化させていく。
	3	③グループで技の出来映えを教え合う。	【技能】①観察 【研究の視点2】 ③④仲間とのかかわりやタブレット等を活用し、技の習熟度を振り返ることができるようにする。
	4	(3) 課題に応じた練習の場を選び、班で協力(アドバイスや補助)して練習する。 (4) 活動の振り返りを行う。	
三	5	3 ひろげる・ふかめる 「体操教室を楽しもう」 (1) 連続技を考え、練習する。	【技能】①観察 【研究の視点2】 ③④技の出来栄カードや動画を活用し、自分の技の習熟度を振り返ることができるようにする。
	6	(2) 苦手な技や連続技の練習を行う。	
	7	(3) 下学年に向けて、体操教室を行う。	

(2) 指導の実際

過程	学習活動及び指導上の留意点
導入	1 準備運動をする。 2 基礎感覚・基礎技能づくりをする。 3 本時のめあてを確認する。 【研究の視点1】 ②連続技の様子を動画で示し課題の共有化を図る。 学習目標（めあて） きれいな連続技ができるようになろう
展開	4 [本時の問い]を確認し、連続技をやってみる。 きれいに技をつなぐためのコツを考えよう 5 本時の「問い」に対し分かったこと気付いたことを伝え合う。 【研究の視点1】 ②連続技を試したり、仲間の技を見合ったりして、自分の考えを持たせる。 【研究の視点2】 ③④ ICT 機器等を利用して、きれいに技をつなげるために、技の終わりで立ち上がることの大切さに気付かせる。 6 自己の課題を練習する。 【研究の視点2】 ③④自己の課題に応じた適切な場で技の習熟が図れるよう、前時の様子等から助言を行う。 徹底指導（ポイント） ・技カルテシートや技ボードを活用し、技のコツを捉えながら演技するようにする。 能動型学習（ポイント） ・班で見合い、前時まで考えてきた技の視点で交流していく。 ・児童の気づきをグループ内で共有化できるように教師の支援を行う。 評価 技能（観察） B基準 技を繰り返したり、組み合わせたりしている。
	7 試技を行い、自分や仲間の技を交流する。
整理	8 学習したことを振り返る。 【研究の視点2】 ④技の出来栄を振り返り、学習シートに記入させる。



表1 学び全体の変容 (n=17) 4件法

有意確率**<0.01 *<0.05

	質問	事前	事後	有意確率
学習活動の充実	体育学習のとき、動いたり、観察したり、アドバイスしたり、理解したりしながら問題を解決しようとしている。	3.59	3.76	0.421
	体育学習のとき、様々な解決方法を試しながら、問題を解決しようとしている。	3.35	3.59	0.298
	体育学習のとき、一人一人ができることを生かしながら、友達や先生と一緒に問題を解決しようとしている。	3.53	3.82	0.096
成長の実感	体育授業のとき、「分かるようになった」や「できるようになった」と感じる。	3.76	3.82	0.749
	これまでに学んだことを生かして体育学習に取り組んでいる。	3.29	3.71	*0.048
	体育学習で学んだことをこれからの学習や生活に生かそうとしている。	3.53	3.76	0.260

ア 研究の視点1について

有意差は顕著に認められなかったものの、事前、事後においての数値の向上は見られ、「問い」を解決するために、自ら主体的に試行錯誤したり、仲間と協働したりする学習活動の充実が図られたと考える。特に「協働的な学び」に関するものとして設定した「体育学習のとき、一人一人が(後略)」においては、児童が共通して持った「感覚的な気付き」から、対話による「体育における見方・考え方」を通して「認識的な気付き」へと学習が進められたことから、児童が知識と技能を関連付け、深い学びに向かうことができた。以下にその一例を紹介する。

<開脚前転の学習場面>

クラスの共通言語として開脚前転を感覚的な言葉（グーン、ストン、パッ）で表した。班でのかかわり合いでは、開脚前転がまだ上手くできないC1に対してのかかわり合いが見られた。開脚前転の開始局面（グーン）について、
 C2：「ジャンプするみたいに。」
 C1：「ジャンプ？」
 C1がやってみる→できる！！
 T：勢いだね。
 C3、C4：「ジャンプ、ジャンプ。」
 C1：「C2さんのおかげだ！」
 <全体の場でのC4の発言>
 C4：「勢いづかなかったので、ジャンプをしてやると上手くいきました。」



この班は、まだ上手くできていないC1を中心にしたかかわり合いの中で、「グーン」といった感覚的

(3) 検証結果と考察

① 「豊かな学び」について

表1は、豊かな学びの「学習活動の充実」と「成長の実感」について見取る質問紙調査の結果である。表2は、単元末に行った「どんな体育の力がついたと思うか」について自由記述による振り返りを行ったものを習熟度別に抜粋したものである。

以下、本実践の検証結果とその考察について、本研究の視点に基づいて述べる。

な気付きを「ジャンプするみたいに」へと認識的な気付きに変化させ、ジャンプすると「勢いがつく」へと開始局面をより深く関連付けることができ、全員ができるようになっていった。

イ 研究の視点2について

表1から、概ね成長の実感についての意識の変容が見られた。特に「これまでに学んだことを生かして体育学習に取り組んでいる」についての変容は有意差が見られ、学習過程での教師の見取りと言葉かけを重視してきたことや運動の意味付けを意識したことが、児童の意識の変化に表れたと考える。

② 「未来の創り手」について

表2は、「未来の創り手」について見取る質問紙調査の結果の一部である。授業前後において変化の見られたものについて示す。

表2 「未来の創り手」に関する変容 (n=17)

質問	事前	事後	有意確率
自分は、学校生活や学習を通して、自分自身が分かるようになった、できるようになったと思う。	3.59	3.76	0.332
自分は、学校生活や学習を通して、周りの人から分かるようになっていて、できるようになっていると認められていると思う。	2.82	3.06	0.410
自分は学校生活や学習を通して学んだことをもとに、自分自身が主体的になったと思う。	3.06	3.18	0.668
自分は、周りの人が学校生活や学習を通して学んだことをもとに、主体的になったと思う。	3.47	3.65	0.332

この結果から、「未来の創り手」に関しては、「成長の実感」「友達からの承認」「主体性」の数値の向上若しくは高い数値を示しているが有意差は見られなかった。理由として、「未来の創り手」としての実感が、個人個人によって違ったり、本年度より始めた研究であり、まだまだ、単元の積み重ねができていない状態であったりしたためであると推察する。

③ 学習内容について

本単元では、「前転」「跳び前転」「後転」「開脚前転」「開脚後転」「側方倒立回転」の習得を図った。

単元終了後の習得率の結果が表3である。

美しさ「スムーズに」を基準にした技の出来栄は、上記のようになった。

特に「開脚前転」「側方倒立回転」における数値の向上は、「児童と教師」「教師と教材」「児童と教材」

の関係が深まりを見せ、表1や表2の成果をもたらしたと考える。

表3 単元終了後の技の習得率の結果

	事前 (%)	事後 (%)
安定した前転	70.6	100
跳び前転	未調査	64.7
安定した後転	58.8	100
開脚前転	29.4	76.8
開脚後転	35.3	88.2
側方倒立回転	17.6	70.6

3 研究のまとめ

今回、小学校体育科では、研究の視点によって「豊かな学び」につながったかを検証した。

(1) 成果

これまで述べてきた表1の変容から、研究の視点による取組により、「豊かな学び」へつながったと考える。

特に、視点1については、「問い」を「児童の視点」、つまり、「運動に児童を合わせる」のではなく、「児童に運動を合わせる」視点からのアプローチを図ったことで、学習意欲が持続し一人一人がマット運動の持つ特性（回転して元の姿勢にもどれるかどうかの面白さ）を捉え、切実性を持って「自己」「モノ（教材等）」「他者」とかかわり、夢中になって取り組むことができた。

このことにより表3の学習内容の定着についても成果が表れた。

(2) 課題

視点2の「成長を実感する振り返りの工夫」について、「児童に運動を合わせる」ことは、簡単なようで実は難しい。そもそも児童に本当に合っているのかどうか見極めるのが難しいからである。だからこそ、児童の「今、ここ」での動きをしっかりと見取り、児童一人一人に合った言葉かけや言葉かけのタイミングを適材適所で行い、価値付ける必要がある。

《引用・参考文献》

- ・文部科学省(2017)『小学校学習指導要領解説体育編』
- ・中央教育審議会答申(2016)『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について』